

6月放送総局長定例記者会見要旨

(1) 「これでわかった！世界のいま」CG動画について (正籙放送総局長)

「これでわかった！世界のいま」の番組ツイッターに掲載したCGアニメーションに多くのご批判・ご意見を頂いた件について、報告いたします。

番組では、6月14日の放送で、責任者が反省点や今後の取り組みを説明し、視聴者の皆さまに謝罪しました。番組のホームページにも、おわびの文書を日本語と英語で掲載しました。人権や多様な価値観を尊重し、差別のない社会の実現に貢献すべき公共放送・公共メディアとして、このような事態を招いたことは痛恨の極みであり、改めておわびいたします。

今回の件を受けて、6月12日に放送現場の責任者による放送倫理委員会を開催して、なぜこのような事態を招いたのかを検証し、問題点などを共有しました。

まず前提として、差別や人種の問題をどう伝えていくかについて、議論を尽くし、慎重に検討するという姿勢が欠けていたと言わざるを得ません。そのうえで、大きく2点のことが言えると思います。1つは、今回の問題について、アニメーションで行った映像表現が適切ではなく、国の内外でどう受け止められるかという問題意識が欠如していました。もう1つは、番組の一部を切り出してSNSに掲載したアニメーションがどう広がり、どのような影響を及ぼすかということへの認識が不十分でした。

これらを踏まえ、ただちに、今回の事例に沿って具体的な注意事項を示した、放送総局長名の文書を、地方局を含めすべての放送現場に通知し、放送に関わる全ての職員スタッフに徹底するよう指示しました。

▼人種や民族などのイメージ映像や画像は安易に作成することはせず、差別を感じさせるような表現になっていないか、細心の注意を払うようにします。

▼動画などをインターネットに掲載する際は、視聴者がどのような印象を受けるのかを的確に見極め、掲載するかどうか慎重に判断するようにします。

▼今回、チェックが不十分だったことから、とりわけ、人種、民族、国家、宗教、ジェンダーの問題などを扱う際には、協会内外の幅広い人材を活用して、複眼的なチェックを行うようにします。

▼今回の問題点と注意事項については、職員スタッフひとりひとりの理解を深めてもらうため、放送・インターネットに関わる現場において、研修や意見交換を実施します。なお研修については、すでに各部局、地域の放送局で始まっています。

また、「これでわかった！世界のいま」では、問題が起きたCGアニメーションの使用をとりやめ、適切な表現方法を検討しています。

今回寄せられたご批判・ご意見の多くは、公共放送・公共メディアとしての基本姿勢を問うものだと受け止めております。NHKの放送に携わる職員スタッフ全員で、今回の教訓をしっかりと受け止め、ことばや表現が差別的と受け取られることがないかどうか感覚を研ぎ澄ましていく取り組みを強化していきます。その上で、人種、民族、国家、宗教など大きな対立を抱える問題こそ、積極的に取材を尽くし、問題の本質に迫り、視聴者に伝えていくための努力を続けてまいります。

(2) 新型コロナウイルス関連番組

NHKスペシャル「人体 VS ウイルス～脅威の免疫ネットワーク」

「世界10代会議」

新型コロナウイルス関連BS1スペシャル (正籙放送総局長)

緊急事態宣言は解除されたが、新型コロナウイルスの脅威は消えていない。NHKは、「公共放送」「公共メディア」として、感染拡大の防止に役立つ放送・サービスを提供してまいりたいと考えている。

まずは、7月4日に放送するNHKスペシャル「タモリ・山中伸弥『人体 VS ウイルス』～驚異の免疫ネットワーク～」。「人体」シリーズでコンビを組んだタモリさんと山中教授が、今回は新型コロナウイルスの謎に徹底的に迫る。生命が誕生して40億年の歴史の中で、幾度となくウイルスと闘ってきた結果、私たちの体内には、驚くほど精緻なウイルス防御ネットワーク、つまり「免疫」が存在している。ところが、新型コロナウイルスは、その免疫の常識を次々とくつがえす力があることがわかってきた。例えば、そもそも私たちの体の細胞は、ウイルスに感染すると、免疫の攻撃部隊を呼び寄せる“警報物質”を大量に放出するが、新型コロナウイルスはこれを阻止する巧妙な仕組みを備えている。

新型コロナウイルスは、いったい何者なのか？免疫力を高めるために、本当に必要なことは何なのか？体内のミクロの世界を最先端の8K顕微鏡などを使って撮影した映像や、精緻なCGで鮮やかに描き、タモリ・山中コンビならではの視点で、パンデミックを生き抜くカギを探る。

Eテレでは、7月2日と9日、2週連続で「世界10代会議」を放送する。

新型コロナウイルスの感染が拡大するなか、世界の10代の若者たちが毎日何を感じ、どのような環境で過ごしているのか、別々の国に暮らす10代が「自撮り」のビデオレターを通して本音で語り合う。参加するのは、日本、アメリカ、台湾、ブラジルなど7つの国と地域の、13歳から18歳の若者たち。寄せられたビデオレターを翻訳し、他の参加者に届けながら会話を深めていく。

「ステイホームの“温度差”はなぜなくなるのか？」「オンライン授業って意外にいい？」「イベントが次々と中止され、わたしたちの思い出はどうなるのか？」など、さまざまなテーマについて、人種や言葉、文化の壁を越えてお互いに理解し共感していく姿を紹介する。

また、BS1スペシャルでは、コロナ禍のなか、動き出したグローバル経済の行方や、感染爆発が起きたアメリカ・ニューヨークの120日間、それに貧困層に感染が広がるブラジルの現状などを伝えるドキュメンタリー番組を放送する。

(詳細は報道資料を参照)

(3) 夏の特集番組

BS1スペシャル「もし75年前にSNSがあったら～つぶやきからみえる戦争と原爆～」

ドラマ&ドキュメント「不要不急の銀河」 (若泉副総局長)

「夏の特集番組」の資料から、2つ番組をご紹介します。

1つめは、8月3日に放送するBS1スペシャル「もし75年前にSNSがあったら～つぶやきからみえる戦争と原爆～」。

NHKでは、ことし2020年3月から、75年前に広島で書かれた日記を、今の言葉に置き換えて公式ツイッターで発信している。番組は、ツイッターで発信される戦時中の暮らしをイラストやCGなどで映像化して伝えるとともに、発信を担う広島の若者たちが、SNSの制作を通して戦争や原爆に向き合う姿を追ったドキュメンタリーだ。

日記を書いたのは、当時13歳の少年や新婚の主婦、新聞記者の男性の3人。その日記を、広島出身や在住の16歳から44歳までの11人が3つのグループに分かれて担当し、日記が書かれた日付と同じ日につぶやく。メンバーは、当時、日記に書かれていたことを実際に体験するなどして想像を膨らませながら、どのような投稿にするのか相談をして文章を作成する。日記には、原爆が投下された8月6日の惨状も記されている。その日記を見た、今を生きる若者たちが、何を感じて、どのような言葉をSNSに発信するのか。75年前と今とが重なる新感覚のドキュメンタリー。

なお、戦争と平和を考える番組につきましては、NHKスペシャルなどでも放送する予定で、詳細が決まり次第お知らせする。

もう1つの番組は、7月23日に放送する、ドラマとドキュメンタリーの2部構成の番組「ドラマ&ドキュメント『不要不急の銀河』」。

ドラマは、作家でお笑い芸人の又吉直樹さんのオリジナル脚本で、新型コロナウイルスの感染拡大により自粛が求められるなか、スナックを営む一家に起きるあつれきや、思春期の息子の恋愛をめぐる葛藤を描く。主人公の男性をリリー・フランキーさんが演じる。

番組のもう一つの要素、ドキュメンタリーは、このドラマの撮影現場を描く。ドラマは、スタジオセットを使って撮影するが、新型コロナウイルスの感染拡大により制作現場が大きな影響を受けるなか、どのように撮影が進められるのか、その舞台裏にカメラを向ける。

(詳細は報道資料を参照)

(4) 「#あちこちのすずさん」キャンペーン (小池副総局長)

NHKでは、去年に続いて「#(ハッシュタグ)あちこちのすずさん」キャンペーンを展開する。このキャンペーンは、おとし夏に「クローズアップ現代+」で、映画「この世界の片隅に」の主人公・すずさんを通して描かれた庶民の戦争体験を取り上げたのをきっかけに始まった。若い世代に、家族などの戦争にまつわるエピソードを「#あちこちのすずさん」を付けてSNSに投稿してもらうことで、戦争体験を伝承していこうというものだ。

キャンペーンは、「あさいち」や「クローズアップ現代+」など、さまざまな番組が連動して展開する。このうち、8月13日には特集番組「#あちこちのすずさん ～若者が語る戦争～」を放送する。若者に人気のラジオ第1の番組「らじらー！」でMCを務める、Hey! Say! JUMPの八乙女光さんと伊野尾慧さんが、SNSへの投稿などで寄せられたエピソードを現地で取材し伝える。またエピソードは、アニメ動画やイラストで再現して、他のキャンペーン参加番組やウェブサイトで紹介する。

ことしは、同じように「戦争体験の伝承」に取り組んでいる地方メディアや全国の資料館、デジタルメディアなどと連携して、「あちこちのすずさん」を共通のテーマとする新たな取り組みを始めた。さまざまなメディアなどがつながることで、若者がより投稿しやすくしたいというのが狙いだ。「あちこちのすずさん」が、“戦争の記憶”を次世代につなげていくきっかけになるよう輪を広げたいと考えている。

(詳細は報道資料を参照)

(5) 「no art, no life in 希望の園」 (林副総局長)

BS4K、BS8Kでは、自由で唯一無二なアートの世界を記録したドキュメンタリー番組「no art, no life in 希望の園」を放送する。

番組の舞台は、三重県にある障害者支援施設「希望の園」。そこに集まる多くの個性豊かなアーティストたちの作品や創作の様子を8K映像で記録した。鳥の絵を描き続ける脳性まひの女性や、妖精から「描いてほしい」と頼まれて子どものころから妖精の絵ばかり描いているという男性など、その表現は十人十色だ。あるがままに表現し続ける人たちの創作の日々に寄り添い、「なんだかわからないけれど、なんだかすごい」世界を、8Kならではの繊細な映像でお届けする。語りは内田也哉子さん。

(詳細は報道資料を参照)